

親鸞における学仏道と病への視座

藤元 雅文

親鸞は、みずからの仏道の学び・歩みにおいて、病に對しどのような視座を有しているのか、またその意義や理由をどのように考えることが出来るであろうか。より具体的に表現するならば、親鸞は仏弟子として、病に直面する自身にいかに向き合い、また同じ時代社会を生き共に仏道を歩む人々（同朋）の病とどのように関わっていかうとしているのか。本発表では、このような問いを考察しつつ、学仏道と病（の苦惱）との関わりについての親鸞の理解を明らかにしたいと考えている。

右記の問題意識のもと、本発表では、まず『仏説無量寿経』や親鸞の名著『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』）等を中心に親鸞における病への基本的視座を確かめる。ここでは、「出離生死」という仏教の根本課題と親鸞における病への視座は不可分であることが明らかにされるであろう。その上で、特に『教行信証』「顕浄土方便化身土文類六末」（以下「化身土卷末」）における「鬼」や「病悪」への言及を取り上げる。親鸞が生きた日本の中世における「病氣観」や「治病」のあり方をふまえつつ、「化身土卷末」における「鬼神」や「魔」また「病」や「死」への論述を考察することで、病に對する親鸞の視座の具体的な特徴を浮き彫りにできればと考えている。さらに本発表の最後の課題として、親鸞自身の生涯において病の当事者として生きた経験や病となった（その結果、親鸞より先に命終した）同朋に對する親鸞の態度を取り上げ、現に病の身を生きる自・他に對し、親鸞が仏弟子としていかに立ち向かい、関わり、共に歩んでいこうとしているのかを明らかにしていきたい。

以上が本発表における考察の内容であるが、今回の大会趣旨文には「仏教と病」の定義が仏教学の中で確認され、…中略…様々な分野から「仏教と病」を見つめ直し、現代における「病」の課題に仏教学が如何に考え、如何に立ち向かう学問であるかという姿勢・方向性を見いだせられたならば大いなる成果といえよう」と記されている。このような今回の学術大会の趣旨に、真宗学の視点から少しでも呼応できる内容となるよう考察をすすめていきたい。

なお、親鸞における「病」の用例には、人間存在の課題性をあらず内容、たとえば煩惱、五逆、謗法、一闡提などを「病」の語をもって譬喩的に表現する箇所が多くみられる。しかし、本発表においては、大会の趣旨を踏まえ、そのような譬喩表現としての「病」の語は考察の対象に入れないこととした。

キーワード…「生死無常」、「鬼神観」、「顕浄土方便化身土文類六末」、「真宗の救済観」